



今年も昨年同様、2輪レースと共催となる2&4レースとして開催されたスーパーフォーミュラ開幕戦。多くのファンが詰め掛けた。

期待の新人達も躍動。スーパーフォーミュラが鈴鹿で開幕!

2018年の全日本スーパーフォーミュラ選手権が4月21日、鈴鹿サーキットで開幕した。

開幕戦にエントリーしたのは昨年同様、19名のドライバー達。所属チームが変わったのは伊沢拓也選手のみでダンデライアンからナカジマレーシングに移籍。伊沢選手が抜けたダンデライアンには昨年までGP2を戦っていた松下文治選手が入った。

同じくヨーロッパでフォーミュラを戦っていた福住仁嶺選手がピエール・ガスリー選手の後

を継いでチーム無限に加入した。ただし福住選手はFIA-F2と掛け持ち参戦となるため、バツティングする場合はF2を優先。そのため、SFは3戦、欠場を余儀なくされる予定だ。

ルーキーはこの2名のほか、B-MAXのシートを射止めた千代勝正選手と、チームマンの7号車をフェリクス・ローゼンクヴィスト選手から受け継いだピエトロ・フィティパルディ選手を加えた計4名。フィティパルディ選手は伝説のF1ドライバー、エマーソン・フィティパルディの孫に当たるサラブレッドだ。

さらに注目は復帰組のドライバーで、平川亮選手は3年のブランクを経てチームインパルからSFに参戦。関口雄飛選手とタッグを組む。もう一人は中嶋一貴選手のチームメイトとなるジェームス・ロシター選手。2年ぶりの復帰だが、所属チームのトムスとはスーパーGTで5年間、キャリアを築いてきた。チームとのコンビネーションは問題なしだ。

注目の公式予選で最初に注目を集めたのは松下文治選手。Q1で断トツの1分37秒台を叩き出すと37秒255まで詰めて首位でQ2へ進出する。



1.開幕戦には4人のルーキーを含む19名のドライバーが勢揃いした。2.3.4.国内トップフォーミュラ初参戦となるルーキー達が予選から魅せた。松下文治選手はQ1で圧巻の走りを見せてトップ通過(2)。一方、ピエール・ガスリー選手からレッドブルカラーを受け継いだ福住仁嶺選手(4)は、チームメイトの山本尚貴選手とフロントローを分け合う2番手を獲得した(3.左)





5.6.2016年開幕戦に続いて2年ぶりに鈴鹿を制した山本尚貴選手。終盤は関口雄飛選手の追撃を受けるも、1.7秒差で抑え切った。7.8.予選14番手からスタートした関口雄飛選手は上位陣とは異なるソフトタイヤでスタートする戦略を採ったが、ミディアムに変えた後も好調なペースをキープし、2位でゴール。9.野尻智紀選手はグリッドと同じ3番手を守ってチェッカー。10.ホンダエンジン勢2台の5位争いは伊沢拓也選手が塚越広大選手を抑えた。11.昨年の王者、石浦宏明選手は4位で開幕戦を終えた。12.ルーキーの一人、ピエトロ・フィティパルディ選手は16位完走を果たした。13.同じく新人の千代勝正選手は予選から3つ順位を上げ、14位で完走。14.上位6台中4台を占めたホンダエンジン勢の速さが目立った今大会。トヨタエンジン勢では関口選手が2位に入り、表彰台の一角に食い込んだ。

Q1で好調だったホンダエンジンユーザー勢はQ2でも速さを見せ、野尻智紀選手がただ一人、36秒台に入れてトップ通過するが、松下選手はセッション終盤、デグナーカーブで1台の車両がコースアウトしたことによる赤旗中断の影響を受け、ベストアタックのタイミングを逸して敗退となってしまふ。

Q3のPP争いはチーム無限の二人が主役となったが、山本尚貴選手が36秒911でトップタイムを奪い、ルーキー福住選手も初戦でフロントローを獲得。Q2のタイムを上回れなかった

野尻選手が3番手に続いた。22日に行われた決勝で注目されたのはタイヤ選択。今年からソフト、ミディアムをそれぞれ最低1回装着しなければならないというルールとなったため、まずはスタート時のタイヤが関心を呼んだが、上位陣はほぼミディアム、中位以下は逆にソフトでスタートという傾向となった。

レースでは、燃料を多く積まず軽いマシンで走れるメリットがある2ピット作戦を選択した5番手スタートの塚越広大選手が前半、2位まで浮上し、PPからホールショットを決めた山本選手の背後に迫ったが、パッシングするまでは至らず。

レース後半はミディアムタイヤで32周まで

引っ張ってソフトに変えた山本選手を、今度はソフト→ミディアムの選択をした関口雄飛選手が山本選手を上回るペースで追撃したが、1.7秒届かず、山本選手がゲンのいい鈴鹿で2年ぶりとなる勝利を飾った。

「終盤追い上げられて、プッシュしようとしたらあまりタイヤが残っていなかったで、最後は全然、余裕はありませんでした。勝ち方としては心の底からは喜ばませんが、開幕前のテストではソフトタイヤをうまく使えなかったこともあって、まさかポールポジションを獲得するなんて思ってもいなかったで、それを思えば、この勝利を素直に喜びたい」と山本選手は、流れを引き寄せた週末を振り返った。

野尻選手が予選の順位を守って3位に入り、昨年の王者、石浦宏明選手が予選から2ポジション上げて4位でフィニッシュした。福住選手は表彰台も狙える位置につけながらもミッドラブルのため、33周目にリタイヤ。無念の開幕戦となった。



N-ONE OWNER'S CUP 第4戦 / 15.予選7番手から3位までジャンプアップを遂げた石坂瑞基選手。16.予選2番手から逆転を狙った小林天翔選手だったが届かず。17.予選でぶっちぎりのベストをマークした小野貴史選手が、決勝でもファステストを記録して首位を守った。18.左から2位小林、優勝小野、3位石坂の3選手。